

高齢期における人間関係の再構築

李 義 昭

キーワード：高齢化 老人クラブ ボランティア活動

I はじめに

20世紀、人々の寿命は大きく伸びた。さらに、21世紀も急速な人口増加はつづき、60歳を超える人々が2050年には約20億人に増加し、平均余命が76歳になると予想されている。また、世界の60歳以上の高齢者の比率は2000年の10%から2050年までに21%に倍増すると予想されている。高齢人口の中で最も増加率が高いのは、80歳以上の高齢者グループであり、今後の50年間でこの5倍以上に増加すると考えられている。わが国では、65歳を超える高齢者は2050年には約3586万人となる¹⁾。高齢者の比率は2005年の20.2%から2055年には40.5%になると予測されている。さらに、高齢期を前期高齢期(65~74歳)、後期高齢期(75歳~)に分けた場合、前期高齢期の増加率は11.1%から14.0%の約3ポイント増加であるのに対して、後期高齢期の増加率は9.1%から26.5%とおおよそ3倍の増加であると考えられている²⁾。

第2回高齢化に関する世界会議において採択された「高齢化に関するマドリッド国際行動計画2002」の行動勧告は、次の優先すべき3つの方向性を示した。

-
- 1) 総務省統計局「第56回日本統計年鑑」平成19年
 - 2) 国立社会保障人口問題研究所「人口統計資料」2006年

1. 高齢者と開発
2. 高齢期にわたる健康と福祉の増進
3. 活動可能かつ支援的な環境の確保

これらは、世界の高齢化に合わせて行う調整を成功させるという目標の達成に向けて、政策を策定し、実施する際の指針となるものであり、その成果は、社会開発、高齢者の生活の質の改善、及び、生涯を通じての福祉の質を支える公式・非公式の様々なシステムの持続可能性の改善に照らして測定されるとしている。さらに、会議に出席した各国政府代表は、その政治宣言の第12項において「高齢者がそれぞれの社会において経済、政治、社会及び文化活動に参加できるということは、高齢者が期待することであると同時に、社会の経済的ニーズを充足することにもつながるものである。高齢者は、働きたいと考えまた働くことができる限り、満足が得られる生産的労働に従事し、かつ、教育・訓練プログラムに参加する機会が与えられなければならない。高齢者のエンパワーメントと高齢者の完全な参加の促進は、活力のある高齢化（アクティブ・エイジング）を実現するための重要な要素である。高齢者には、持続可能で適切な社会的支援を提供しなければならない。」とした。

わが国の「高齢社会対策大綱」は、その策定の目的を「我が国の人口構造の高齢化は極めて急速に進んでおり、経済社会の重層的な転換とあいまって国民生活に広範な影響を及ぼしている。今後、戦後生まれの人口規模の大きな世代が高齢期を迎え、我が国は本格的な高齢社会に移行する。こうした中で、国民の一人一人が長生きして良かったと誇りを持って実感できる、心の通い合う連帯の精神に満ちた豊かで活力のある社会を確立していくためには、経済社会のシステムがこれからの高齢社会にふさわしいものとなるよう不断に見直し、個人の自立や家庭の役割を支援し、国民の活力を維持・増進するとともに、自助、共助及び公助の適切な組合せにより安心できる暮らしを確保するなど、経済社会の健全な発展と国民生活の安

定向上を図る必要がある。」としている。

ここでは高齢者の増加は、人間関係、所得・就労、健康・生活などにおける、新たな「喪失」を経験する世代の増加という事実に基づき、その「喪失」を埋めるための人間関係の構築について考える。

Ⅱ 高齢期における「喪失」

1. 人間関係

私たちは、高齢化につれて定年退職、子供の独立、友人や配偶者との離別・死別など多くの「喪失」を経験するようになる。その喪失は、阪神大震災で社会問題化した孤独死など高齢者の孤立の問題へとつながっている。

戦後、我が国の死亡率（人口1,000人当たりの死亡数）は、生活環境の改善、食生活・栄養の改善、医療技術の進歩等により、昭和22（1947）年の14.6から昭和54年には6.0で底を打った。しかし、近年の死亡率はやや上昇傾向にあり、平成17年は8.6（死亡数は108万3796人）となっている³⁾。

これは高齢化の進行により、他の年齢階層に比較して死亡率が高い高齢者の占める割合が増加したことによるものである。高齢者の死亡率は加齢と共に増加し、前期高齢者になると死亡率は男で16.6、女で6.7を超え、後期高齢者になると、その死亡率は男で43.6、女で19.9超となり、90歳以上では男が209.8、女が152.1となる（表1）。2004年における高齢化率（高齢者人口の総人口に占める割合）は19.48%となっており、2050年には高齢化率は35.65%に達し、国民の約3人に1人が65歳以上の高齢者になると見込まれている⁴⁾。これは、わが国の死亡率がさらに上昇する可能性

3) 厚生労働省「人口動態総覧」平成18年

4) 国立社会保障人口問題研究所「人口統計資料」2006年

高齢期における人間関係の再構築

表1 2004年年齢別死亡率(千%)

年齢	男	女
65～69	16.6	6.7
70～74	26.5	11.2
75～79	43.6	19.9
80～84	71.7	38.1
85～89	124.4	75.4
90～	209.8	152.1

国立社会保障人口問題研究所「人口統計資料」2006年

を示しているものと思われる。このような高齢期における死亡率の増加は、高齢者にとって友人や配偶者との離別・死別の増加を意味し、老齢化と共に親密な人間関係が失われる事を意味する。すなわち、高齢者には精神的な「喪失」を多く経験する時期が待ち受けているのである。なお、先進諸国の平均寿命は年々伸びており、日本が82歳で長く、アメリカ78歳、イギリス79歳、フランス80歳、イタリア81歳、ドイツ79歳などとなっている⁵⁾。

また、日本の65歳時平均余命は2004年時点で男18.21歳、女23.28歳となっており、2050年には男19.73歳、女26.16歳とさらに長くなると考えられている。様々な「喪失」を経験する高齢期が前期高齢期から後期高齢期へと先へ延びているのである。

2. 所得・就労

平成15年の高齢者世帯の平均年間所得は290.9万円となっており、全世帯平均579.7万円の半分程度である。総所得の71.9%は「公的年金・恩給」などの社会的給付で、「稼働所得」は17.9%、「財産所得」は5.4%となっている。高齢者世帯の年間所得は、50万円未満が4.1%、250万円未

5) 総務省統計局「第56回日本統計年鑑」平成19年

満までで約半数の 53.0% を占める⁶⁾。

生活保護を受けている者のうち 60 歳以上の高齢者は平成 7 年には 44.0% であったが平成 17 年には 49.8% となっている。これは、人口に占める高齢者の割合が増加しており、それが一因となっているものと考えられる。なを、非保護率も 14.63 千% から 20.25 千% に増加している。非保護世帯の 47.9% は高齢世帯であり、その内一人世帯は 88.0% を占め、前期高齢者が 52.2%、後期高齢者が 38.4% である⁷⁾。

また、高齢者の就業状況は、男性 55～59 歳で 90.1%、60～64 歳で 68.8%、65～69 歳で 49.5% となっている。不就業者のうち就業希望者はおよそ半数で、55～59 歳で 77.8%、60～64 歳で 51.6%、65～69 歳で 41.6% となる。また、仕事に就けなかった理由では、60～64 歳で 26.3%、65～69 歳で 29.7% が健康上の理由を挙げている⁸⁾。高齢者の雇用情勢をみると、平成 17 年の完全失業率は、55～59 歳で 2.6%、60～64 歳で 2.8%、65 歳以上で 1.1% である⁹⁾。また、同年 10 月の有効求人倍率は、55～59 歳で 0.44 倍、60～64 歳で 0.50 倍、65 歳以上で 1.77 倍となっており、特に 60～64 歳の年齢層の雇用情勢は極めて厳しい¹⁰⁾。

このように、わが国の高齢者は、働きたいと考えまた働く事が出来る限り、満足の得られる労働に従事できる状況にあるとは言えない。これは、高齢化と共に、所得の「喪失」を経験する事を意味し、加齢と共に就労の機会の「喪失」を経験する事を意味する。このような経験は、人々の「生きがい」や「やる気」、社会的役割を果たすことでの「満足感」を損ねる結果となりうる。このような、高齢を理由として、人々が社会的役割を果たすことから疎外され、満足して社会生活が送れないようであれば、「高

6) 厚生労働省「国民生活基礎調査」平成 16 年

7) 厚生労働省「被保護者全国一斉調査」平成 16 年

8) 厚生労働省「高齢者就業実態調査結果の概況」平成 16 年

9) 総務省統計局「労働力調査報告」平成 18 年

10) 厚生労働省職業安定局「職業安定業務統計」平成 18 年

「高齢社会対策大綱」の言う、国民の一人一人が長生きして良かったと誇りを持って実感できる、心の通い合う連帯の精神に満ちた豊かで活力のある社会の確立は困難なものとなってくる。

3. 健康・生活

高齢者の健康状態では、平成 16 年における 65 歳以上の高齢者（入院者を除く）の有訴者率（人口 1,000 人当たりの病気やけが等で自覚症状のある者の数）は 493.1 とおよそ半数の者が自覚症状を訴えている。高齢期における有訴者率は後期高齢者になるほど高くなり、65～74 歳で 462.1、75～84 歳で 537.1 となる。また、通院者率は前期高齢者が 612.0 であるのに対して、後期高齢者は 688.8 となる。平均的には亡くなる 8.5 ヶ月前には寝たきりとなると考えられている。

一方、日常生活に影響のある 65 歳以上の高齢者（健康上の問題で、日常生活の動作・外出・仕事・家事・学業・運動・スポーツ等に影響のある者。入院者を除く）の割合は、平成 16 年において、高齢者人口 1,000 人当たりで 246.1、70 歳以上では 281.4 となっている。年齢別では、65～74 歳で 190.1、75～84 歳で 296.8、85 歳以上では 416.8 のように年齢層が高いほど大きく上昇し、65 歳以降高齢者の男女別では、いずれの年齢層においても女性が男性を上回っている。

日常生活への影響を内容別にみると、日常生活動作（起床、衣服着脱、食事、入浴など）が 65～74 歳で 65.1、75～84 歳で 131.3、85 歳以上では 269.6、外出（時間や作業量などが制限される）が 65～74 歳で 68.8、75～84 歳で 137.7、85 歳以上では 218.2 とり、次いで仕事・家事・学業（時間や作業量などが制限される）が 65～74 歳で 78.3、75～84 歳で 116.0、85 歳以上では 131.3、運動では 65～74 歳で 57.4、75～84 歳で 69.8、85 歳以上では 86.8 となっている。65 歳以上男女別では、男性は日常生活動作、女性は外出が最も高くなっている。65 歳以上高齢者の悩みやストレスの第一位は自分

の健康・病気であり、第二位は自分の老後の介護となっている。健康状態を総合的に見た場合、自覚症状・通院・日常生活への影響が共にあるとした高齢者は男、65～74歳で14.3、75～84歳で22.9、85歳以上では32.8、女は65～74歳で15.7、75～84歳で26.1、85歳以上では34.7と加齢と共に大きく増加してくる。

介護に関しては、要支援または要介護者のいる世帯の40.4%は高齢者世帯で、その74.4%は要介護者がいる世帯である。また、夫婦のみ世帯は19.5%で、その内81.7%に要介護者がいる。要介護者等と同居している主な介護者の年齢では、要介護者等の年齢65歳以上で、60歳以上の主な介護者が55.9%を占め、65歳以上要介護高齢者の2人に1人は老老介護の状態にある。要介護者を年齢別に見た場合、94.8%が65歳以上であり、65～74歳で17.9%、75～84歳で42.6%、85歳以上では43.4%となる¹¹⁾。

高齢期には人間関係の「喪失」、所得の「喪失」、就労機会の「喪失」に加え、加齢による健康の「喪失」を起因とした、日常生活での活動の自由が低下して行くという、生活の「喪失」が待ち受けているのである。

4. 安全・不利

高齢期になると社会的不利による被害者になることが多く、交通事故による死者数は、12年連続で65歳以上の高齢者が最も多く、全死者数の40%を超えている。平成17年の死者数は6871人で65歳以上高齢者は42.6%を占める。その内、前期高齢者が18.0%、後期高齢者が24.6%となっている。また、交通事故の被害者であると考えていい歩行中の死者数は全体の30.6%の2104人で、65歳以上高齢者は65.2%を占め、前期高齢者が491人、後期高齢者が881人である。加齢と共に交通事故の被害者になる事が多くなり、後期高齢になるほどその比率は高くなる¹²⁾。また、火災

11) 厚生労働省「国民生活基礎調査」平成16年

高齢期における人間関係の再構築

表2 火災による65歳以上死亡者

平成	全死者数	65歳以上	%
13年	1390	670	48.2%
14年	1372	683	49.8%
15年	1433	744	51.9%
16年	1380	726	52.6%
17年	1599	839	52.5%

各年の「消防白書」より

による65歳以上の死者数は、平成13～17年にかけて死者数の50%前後を占めている(表2)。平成17年の逃げ遅れによる火災死亡者は全体の57.0%を占め、899人である。そのうち、65歳以上高齢者は489人で54.4%、前期高齢者が170人、後期高齢者が319人となっている。火災においても、高齢者は被害者になりやすく、特に後期高齢になるほどその比率は高い¹³⁾。高齢期には、健康の喪失が生活の喪失となり、その日常生活での活動の自由が低下し、それが社会的不利へとつながり、高齢者の安全をも脅かすようになる。

5. 人間関係の再構築

私たちは、高齢化とともに、友人・配偶者など親密な人間関係の「喪失」のみでなく、所得の減少、就業機会の減少、健康状態の低下による社会参加機会の減少などいろいろな「喪失」に直面するようになっていく。中でも、親密な人間関係の「喪失」は、人々を深刻な孤立状態に追い込むことになる。特に配偶者との死別は、心身ともに大きなショックを伴うであろう。このような「喪失」から立ち直るためには、親密な人間関係の存在が必要で、家族、親友、ご近所などとのつながりや関係性が豊かになれ

12) 警察庁「交通事故発生状況」平成17年

13) 消防庁「消防白書」平成18年

ば、高齢者の孤立や孤独は防がれるであろう。このような高齢者の社会関係の維持と拡大が喪失のショックを和らげてくれるものと思われる。高齢期における人間関係には、これまでの人間関係のいっそうの継続と、経験する新たな「喪失」を埋め合わせる、新たな親密な人間関係を作り出す必要がある。それは、精神の安定や生活の充実感とつながり、いわゆる生きがいある老後へと導いてくれるのである。

高齢期における人間関係の再構築について、カーンとアントンヌッチの提唱したコンボイモデルがある。これによると、人間関係は本人を中心として、3重の構造からなっており、日常生活で中心の本人を取り巻く配偶者や親しい親族や親友など、その人の社会的役割に関係なく長期にわたる安定した人間関係を築き上げてきた極めて親しい人たちが位置する。この人たちが人間関係形成の重要な提供者であり、本人を取り巻くもっとも内側の層を成している。その外の層には、ある程度の社会的な役割関係に基づいた、時とともに変化する人間関係が位置している。この層には、友人、親戚、親しく付き合っている近所の人々などがあり、ここでもまた、社会生活における新たな人間関係が形成されている。さらに、その外側には、人間関係が完全に社会生活における役割にもとづいた関係からなる層があり、その人間関係は、あまり長続きするものではなく、社会的な役割が変化することによって、変化する人間関係である。この層には、遠く離れた親族や職場の同僚、近所づきあい程度の隣人、会計士や弁護士、医師や介護士などの専門的職業者が挙げられる。

このように多層的な人間関係を構成する人々の種類や数は、年齢の経過や社会環境の変遷と共に変化する。外側の層にある人間関係ほど変化しやすく、内側にある安定した人間関係ほど年齢の経過や社会的環境の変遷の影響を受けにくい。特に高齢期になると、人間関係の喪失の増加によって、その種類や量は減って来る。加齢とともに経験する「喪失」を多層的な人間関係の他の層の人々が埋め合わせるようになる。すなわち、最も内

側の層にあった人間関係が喪失した場合、減少した人間関係の種類や数の穴を埋め合わせるように、より外側の層や他の層にあった人間関係がより親密な形となって構築されるのである。たとえば、配偶者との死別など消滅した人間関係を、茶のみ友達や友人、娘や息子が補う様にてある¹⁴⁾。

人々は年齢以外で高齢者を定義する場合「身体が自由がきかないと感じるようになった時期」(39.8%)に老人になったと実感するとしている。さらに、「年金を受給するようになった時期」(23.1%)、「仕事から引退し、現役の第一線を退いた時期」(12.3%)、「介護が必要になった時期」(12.0%)、「子どもなどに養われるようになった時期」(10.4%)などが挙げられる。男女別では、男性は女性に比べて「仕事から引退し、現役の第一線を退いた時期」(男性16.8%、女性8.3%)を挙げており、女性は男性に比べて「身体が自由がきかないと感じるようになった時期」(男性37.6%、女性41.8%)、「介護が必要になった時期」(男性8.7%、女性14.9%)を多く挙げている。また、すべての年齢階層で「身体が自由がきかないと感じるようになった時期」が多くを占める。

「配偶者と死別した時期」(0.5%)をあげるのはわずかであるが、65歳以上高齢者になると急増する。前期高齢者で1.1%、後期高齢者になると2.3%に跳ね上がる。また、不安を感じることでは、「年金・介護・医療など社会保険給付の減少」(76.2%)「自分の健康」(72.2%)などであるが、65歳以上高齢者では「自分の健康」への不安が高くなっており、前期高齢者で81.4%、後期高齢者で87.5%となる。また、「配偶者との死別」は前期高齢者で高く、「家族との人間関係」が不安に感じることとして後期高齢者で高くなる¹⁵⁾。

14) Kahn, R. L. and Antonucci, T. C., 1980, *Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support*, in Baltes, P. B. and Brim, O. G. Jr. (eds.), *LifeSpan Development and Behavior*, Vo 1. 3. Academic Press, pp. 255-277

15) 内閣府「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」平成16年

人々が「自分が年をとった」と感じるのは、やはり「体力が落ちたと思ったとき」(68.3%)が最も多く、その他に「自分の外見が昔と変わったとき」(53%)「もの覚えが悪くなったとき」(44.5%)など身体的な理由が挙げられている。しかし、これらの回答を「生理的次元」「社会的次元」「心理的次元」の3つの次元と、60歳台と75歳以上の2つの年齢階層に分割してクロス分析を行った場合、「生理的次元」では年齢階層による大きな差は見られないが、その他の次元では年齢階層により差が見られる。後期高齢者は「社会的次元」で「親しい友人や家族がなくなったりしたとき」(26.9%)を前期高齢者のおよそ2.3倍、「心理的次元」では「外出がおっくうになったとき」(38.5%)をおよそ前期高齢者の2.1倍の高さで挙げている¹⁶⁾。

人々に「老齡」を感じさせるのは、身体的な「喪失」が最も大きな要因になっているが、加齢とともに人間関係の「喪失」が、その重さを増してくると言う事が出来る。

6. 老人クラブ

近年、老人クラブへの加入は減少傾向にあり、都市部でのクラブ加入率は20%程度の低迷が続いており、クラブの助成要件である50人の会員が集まらない所もある。一方、農村部では多くが100%加入で、一定の年齢に達すると当然老人クラブに加入するものとする慣習が生きている。クラブは地域における人間関係をつないでおり、特に農村部でのその役割は大きい。老人クラブに加入している高齢者の近所づきあいは、かなり親密であり、人間関係は深い(図1)。

老人クラブ活動の活発な地域では、老人クラブは住んでいる地域の環境を整えたり美しくしたりなど、地域整備の活動に取り組んでいる。また、地域における祭りやイベントなどの地域行事の開催にも努めている(図

16) 堀董夫「教育老年学の構想」学文社 1999年 P158

高齢期における人間関係の再構築

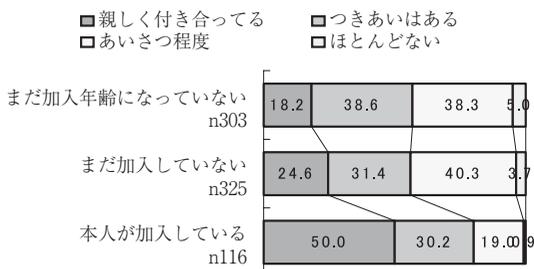


図1 近所づきあい
「都市部における老人クラブ活動の活性化方策に関する調査研究報告書」 p 59

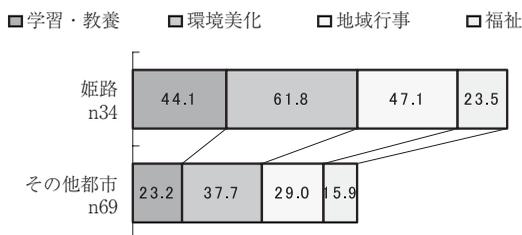


図2 取り組んでいる活動
「都市部における老人クラブ活動の活性化方策に関する調査研究報告書」 p 54

2).

このような老人クラブが行う行事に、地域の住民が参加することにより、そこに住んでいる人々の人間関係は、さらに深められているものと考えられる。また、友愛活動などの福祉関係の活動も多く行われている。居住地域の中で色々と困っていたり、不自由していたりしている、高齢者や障害者などへの気遣いや支援は、地域の人々の絆を強め、人間関係の構築に役立っているものと思われる。子育て中のお母さんなどへの、色々な悩み事相談や若いお母さんとお年寄りとの子供を介した交流は、高齢者が若い親から学び、若い親が高齢者から学ぶという、世代間の相互理解を深めてくれるものと思われる。このような三世代の交流は、異なる世代間における新たな人間関係の形成に大きな役割を果たしている。

高齢期における人間関係の再構築

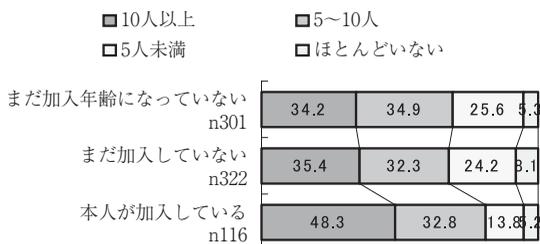


図3 友人の数

「都市部における老人クラブ活動の活性化方策に関する調査研究報告書」 p 60

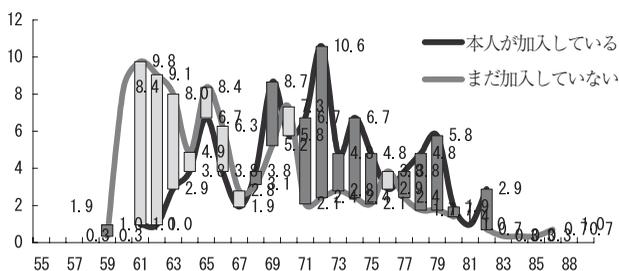


図4 加入年齢

「都市部における老人クラブ活動の活性化方策に関する調査研究報告書」 p 58

地域社会に溶け込んだ老人クラブ活動は、地域住民の人間関係を深め、若年層と老年層、障害者と健常者、前期高齢者と後期高齢者など、様々な人々の新たな人間関係の構築を可能にしてくれる。また、老人クラブに加入している人々の、「親しく近所づきあい」をしている割合は高くなっており、「普段付き合いのある友人の数」は多くなっている（図3）。老人クラブに加入している高齢者の年齢は高いものが多く、逆に加入していない高齢者の年齢は低いものが多くなっている（図4）。当然、若い高齢者にはまだまだ元気な人々が多く、「老人になった」とは実感できないし、「自分が年をとった」と感じることは出来ない。さらに、「老人にはなりたくない」と思い、新たな人間関係の構築の必要も感じにくいであろう¹⁷⁾。しか

17) (財) 21世紀ヒューマンケア研究機構『都市部における老人クラブ活動』

し、これからの高齢社会において、後期高齢者が増えてくることははっきりしており、「親しい友人や配偶者を亡くす」などの社会的次元における人間関係の「喪失」という経験を通じて、新たな人間関係の構築を必要とする人々が増加してくるものと考えられる。

7. ボランティア活動

現代の特徴、特に都市部におけるそれは家族の崩壊と地域社会の解体にある。高齢者の支援は家族や親族だけでは難しくなっている。都市部におけるこのような社会背景の下に、ボランティア活動が発展しつつある。特に高齢者による活動は、世代間を越えた新たな人間関係を構築し、地域での他人含んだ世代間交流を促進する意味で注目されている。それは一方で、都市部で孤独な一人暮らしを強いられる高齢者が、さまざまな試練に遭遇しつつ、一つ一つハードルを越えていくための身近な手段となりうる。

今後ますます増える出あろう一人暮らしの高齢者が、地域の異なった世代、異なった生活・職業経験を持つ人々と交わり、支えあうことによって、人間関係の「喪失」を埋め合わせ、生きがいある晩年を送る。そのような手段として、高齢者ボランティア活動の役割は大きい。

ボランティア活動の始まるきっかけは、男性は定年、女性はPTAやごみ問題、介護問題や友人仲間など、人生のあらゆるステージである。活動の始まる時期は、男性は50代後半から急増し、女性は40代に入ったころから、徐々に増加する(図5)。男性は定年、女性は子供の手が離れたころであると考えられる。

ボランティア活動は、地域や身の回りに関連の深い「保健福祉活動」と「コミュニティ」の活動に大きく二分される(図6)。また、「生活環境改善などの活動」も地域に関わりが深い。保健福祉の活動は子供や夫の世話

▽ の活性化方策に関する調査研究報告書』兵庫県平成15年

高齢期における人間関係の再構築

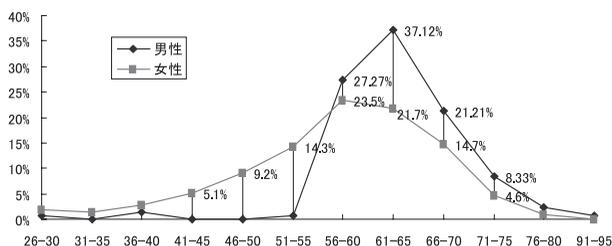


図5 ボランティア活動を始めた年齢
「高齢者ボランティアの実態と意識に関する調査研究報告書」 p 8

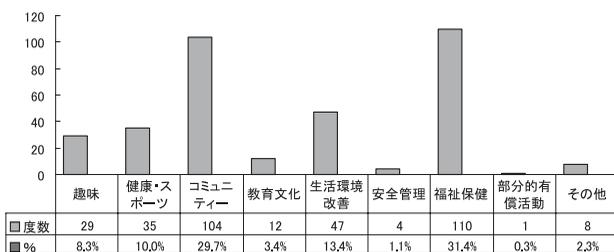


図6 最も重要なボランティア活動
「高齢者ボランティアの実態と意識に関する調査研究報告書」 p 10

など家事に関わることの多い女性に多い。

ボランティア活動には、社会や職業における経験の異なる人々、年齢や生活環境が違った人々との交流があり、高齢者や障害者など他人に役立っているという喜びがある。さらに、生活に充実感を与えたり、健康の維持と増進を促したりしてくれる。また、これまでの知識や経験を役立てることを可能にし、新しいことにチャレンジする機会を与えてくれる(図7)。

ボランティア活動は、地域や隣人などとの助け合い、若い世代と高齢の世代との助け合い、障害者や高齢者など社会的に困難を持っている人への支援やボランティア、今まで世話になった地域や社会への恩返しなどの思いを通じて、感動や喜びに接し、生きがいを感じるために行われていると言える(図8)。

高齢期における人間関係の再構築

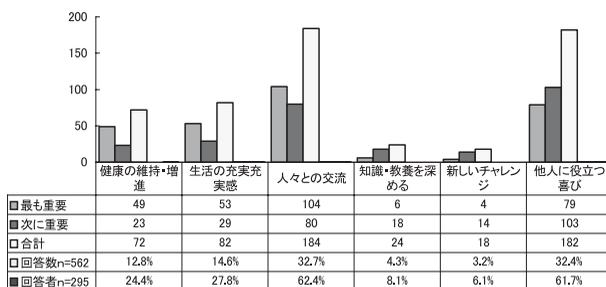


図7 ボランティア活動が与えるもの
「高齢者ボランティアの実態と意識に関する調査研究報告書」p 50

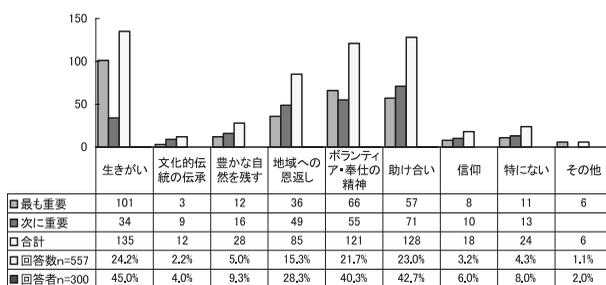


図8 ボランティア活動を支えるもの
「高齢者ボランティアの実態と意識に関する調査研究報告書」p 47

ボランティア活動では、自身と異なった人々との交流を通じて、お互いに理解が生まれる。活動を続け、作り上げて行く中で仲間が出来、相互の信頼が生まれる。そこには活動を成し遂げる喜びがあり、互いに頼りあい、また、人の役に立つ喜びを感じる瞬間がある。そのような瞬間は、生きがいにつながっている。生きがいは身体的にも精神的にも健康をもたらす結果となる。このように、ボランティア活動においては、生きがいと健康が相互に良い方向に働いており、生きがいと健康の増進が相乗的に促進されていることとなっている¹⁸⁾。

18) (財) 21世紀ヒューマンケア研究機構『高齢者ボランティアの実態と意識に関する調査研究報告書』兵庫県 平成13年

Ⅲ おわりに

わが国の高齢化はすでにかなり進んでおり、さらに、人口の多さゆえに戦後社会に大きな影響を与えてきた「団塊の世代」が高齢期を迎える。同時に、わが国は本格的な高齢社会に入る事となる。この世代は、今後の高齢社会に大きな変化をもたらせるものと考えられている。「高齢社会対策大綱」が言うように、彼らの多くはおそらく、健康で活動的、そして経済的にも豊かである。また、年齢にとらわれることなく、多様で自身の気に入ったライフスタイルを楽しもうとするであろう。

この高齢社会において、人々は長生きして良かったと誇りを持って実感でき、心が通い合い、互いに助け合って、活力ある生き方が出来るようにしなければならない。そのためには、彼らが働きたいと思うなら、また働くことが出来る限り、満足が得られる就労の機会が必要である。また、そのための教育や訓練を受ける機会が必要であるし、就労や訓練のための支援が与えられなければならない。

高齢化による資産や所得などの経済的「喪失」は、高齢者の生活の安定を損なわせ、活力をそぎ、老後を不安に陥れる。病気やけが、高齢化による様々な日常生活への困難など、健康状態の「喪失」は、高齢者の生活への不安を増大し、彼らの活力を失わせる。一方で、介護費や医療費など社会保障費を増大させ、経済社会の活力に影響を与える。そのため、高齢期における介護や医療など健康面における支援だけでなく、若年期からの健康問題の予防と老後に備えることへの対処が必要となっている。

退職や現役からの引退、子供の成長・独立、親や配偶者との離別・死別など、人間関係の「喪失」は大きなストレスとなり、人を不安にさせ、その人を孤独な状態に追い込むこととなる。そのため、高齢者の地域社会への参画、地域社会の相互扶助、地域社会における老若の交流は、人間関係

の「喪失」を埋め合わせ、新たな人間関係を構築するのに必要となってくる。

地域社会にしっかりと定着した老人クラブは、「喪失」した人間関係を埋め合わせ、新たな人間関係を再び創って行く役割を果たしている。老人クラブ活動の活発な地域における、人々の居住年数は長く、近所づきあいは濃密である。また、老人クラブに加入している人々の、近所づきあいは親密であり、友人の数は多い。さらに、活動の活発な老人クラブにおいては、高齢者が若い親から学び、若い親は高齢者から学ぶ、三世代交流による相互学習が始まっている。これは、われわれが失ってしまった、親やお年寄りから子供たちが学んでいくという、家庭内教育の再構築の姿と見る事が出来る。

高齢者の地域社会におけるボランティア活動は、社会や職業、年齢や環境、高齢や障害、それぞれ異なった経験や個性を持つ人々を結びつけ、お互いに支えあったり、喜び合ったりしながら展開されている。それは、地域や隣人、若い世代と高齢世代の世代間交流を通じて、人間関係を深める事を促進している。高齢者はそのような活動の中で、生きがいややりがいを感じている。このような新たな人間関係の再構築が、都市で孤立しがちな高齢者を「喪失」から立ちなおさせることが出来る。生活における充実感、高齢者の健康へと結びつき、国民一人一人が長生きして良かったと誇りを持って実感できる社会の確立へと向かわせる。

平均余命が大幅に伸び、多くの高齢者は元気である。なかなか「老人」になったとは思われない。しかし、加齢につれて多くの「喪失」が待ち受けているのも事実である。われわれの目指す高齢社会においては、地域社会に溶け込んだ老人クラブやボランティア活動のような、新たな人間関係を構築しうる、活動・交流組織が必要になってくるのではないだろうか。また、そのような役割を果たしうる、農村社会や都市社会に適した、地域に密着した老人クラブのような組織、人々を孤立から解放する地域ボラン

ティア活動を活性化させる事が、これからの高齢社会を迎えるに当たって必要なのではないだろうか。

参考文献

- 第2回高齢者問題世界会議『マドリード国際行動計画』2002年
内閣府政策統括官『高齢者の健康に関する意識調査』平成15年
内閣府『高齢社会対策大綱』平成13年
堀董夫『教育老年学の構想』学文社 1999年
東洋他編訳『生涯発達の心理学』2巻 新曜社 1993年
社会福祉士養成講座『老人福祉論』中央法規 2005年
経済協力開発機構『世界の社会政策の動向』株式会社明石書店 2005年
経済協力開発機構『高齢社会日本の雇用政策』株式会社明石書店 2005年
(財)21世紀ヒューマンケア研究機構『都市部における老人クラブ活動の活性化方策に関する調査研究報告書』平成14年 兵庫県
(財)21世紀ヒューマンケア研究機構『高齢者ボランティアの実態と意識に関する調査研究報告書』平成13年 兵庫県

Abstract

In this paper, we are discussing the loneliness in the aging. Moreover, the activity of a senior citizens' club and an elderly-people volunteer is discussed. If he and she becomes an old man, isolation of human relations, the fall of income, reduction of work, the fall of health, the disadvantage of a life, etc. are awaiting. Isolation of human relations serves as biggest shock for elderly people (75 or more years-old). The senior citizens' club has played the role in the agricultural area, and the elderly-people volunteer activity has played the role in the city part. Because of reconstruction of human relations in the aging, the activity of a senior citizens' club and the elderly-people volunteer are useful.

Key words : aging, senior citizens' club, volunteer work

(2007年6月30日受理)